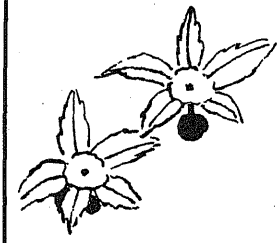

新年の童謡

葛原しげる

一

年のはじめに歌ふ童謡、それは、お正月の歌に他ならないのですが、かなり永く、次のが、廣く歌はれてをります。そして其の作者が、今は、歴史上の人物であることも、從つて、その歌詞が、少くとも幼兒の言葉でないこと、またいつの程よりか、妙な替歌まで出來て、「をはりなき世」が「尾張名古屋」となり、「松竹たて――」が、「松竹ひつくりかへして大騒ぎ」などゝ滑稽なものにさへなつてしまつてゐることなども、大に、考へなくてはならない點かと、案じてをります。但し、よし作者は誰であらうとも、幼兒にも解り易いものでさへあれば宜いのですが、殊に第二節のも、

「君がみかげに　たぐへつゝ」

の六かしさ。「こそ」「けれ」の係り結びは、よいとしても、冒頭からして、「ためしとて、をはりなき世のめでたさを」などゝ、いと、やかましい事であります。しかし、その時代としては、これも已むないところでせうか。

一月一日　　千家尊福氏作歌
　　上　眞行氏作曲

年のはじめの　ためしとて
をはりなき世の　めでたさを
松竹たてて　門ごとに
祝ふ今日こそ　樂しけれ

初日の光　さし出でて
四方にかゞやく　今朝の空

君がみかげに　たぐへつゝ
仰ぎ見るこそ　たふとけれ

のち、特に、幼兒向に出來たのが、次のお正月です。これは、男兒向に第一節に於て「凧」と「獨樂」を出し、女兒向に第二節に於て「まり」と「はね」を出して、全くもつて、樂しましめた、早く來い來い、なのです。何れもみな全國的に、幼兒の正月の景物ですから、全國で歌はれるのもうべなはれます。

お　正　月　　幼稚園唱歌

もう　いくつねると　お正月
お正月には　凧あげて
こまを廻して　遊びませう
早く來い來い　お正月

もう　いくつねると　お正月
お正月には　まりついて
追羽根ついて　遊びませう
早く來い來い　お正月

まことに、きちんとして、整つた形であり、內容であります。

二

これとは別ですが、大正の初期に、發表しました拙作に次のがあります。

日本のお正月　　小松玉巖氏作曲

一、どこから來た來たお正月
大きな正月　おめでたう
凧　獨樂　毬もち　羽子をもち
弟や　妹の部屋部屋に
何處から來たのか　お正月

弟　妹　萬々歲

といふのです。これは、誰でも、「正月が來た」といひ、「新年が來た」といひますので、その「來た」といふ言葉を、重く、子供心に訴へて、

「一體、正月は、どこから來るのであらう」

と疑つて見たのです。どこから來るかは知らないが、兎も角、何處からか來る——その來るや、弟には、凧と獨樂を持つて來、妹には毬や羽子を持つて來てゐる——たしかに「正月」といふものが、さうした弄具を持つて來て呉れるのだ、と、解釋すること、恰も、サンタクローズが、煙突から家の中にはいつて來て、善い子の靴下の中に、弄具を入れておいてくれるのだと、キリスト敎の家庭の幼兒が解釋するのと同じです。ところで、次の第二節では

二、東に昇るお日樣が
皆に　お年を　一つづつ

めでたいお年を取らせるこ
いの一番に　日本に
およこしなされたお正月
日本帝國　萬々歳

こいひました。ですから、題も『日本の正月』なのです。事實、太陽は、いの一番に、日本を照らすのだこは、昔の昔、誰がきめたのか、歐米人までがさういふここになつたのかは分りませんが、『櫻さく國』の名こ共に『昇る日の國』こは、よくも、名づけられたる我が國ではありませんか。それを思うて、この第二節を作りました。中でも、新年＝正月、それは、地球上の誰でもに、年を一つ宛殖やしてくれるものですが、それを、お日樣が、つまりは、その原因であるこ解してかうしたのです。

これを、すつかり、幼兒向にしたものに次の拙作があります。

一月一日　　小松耕輔氏作曲

一、けふは　今年の一番はじめ
一月一日　嬉しいな
けふから　私のお年が一つ
大きくなつて　嬉しいな
はやく　おこなに
なりませう

二、けふは　今年の一番はじめ
一月一日　をかしいな
けふから　誰でもお年が一つ
大きくなつて　をかしいな
みんなが　おこなに
なりました

（大正幼年唱歌第四集）

子供時代には、正月が、何だか、うれしくてたまりません。そして、早く、大人になりたくてたまらないここ、老人が、正月を、さして悅ばないのこ正反對です。その正月になるこ、誰でも實際年が一つ殖えるのですから、をかしいです。たゞ一夜へだてゝ、明日が來年になるのですからよく、考へてみるこ、變です。しかも誰も彼も皆、それを取扱つたのでした。

三

この『日の出』を主題こしたものも、幾つかあります。

初日の出　　山田禎一氏作歌

えつさか　もつさか　ごつこいしよ
おてんこ樣が顏出した
一年中の　のぼりぞめ
ゆつくり　おちつき　上らうぞ
えつさか　もつさか　ごつこいしよ

おてんさ樣の上りぞめ

しかし、これでは、太陽の上るのが、のろ過ぎます。「ゆつくり上らうぞ」さはいひながら――一體、太陽の昇るのは、見てゐるさ中々、ゆつくりで、鈍いのではありますが、しかし、さう見るよりは、殊に、「初日の出」なら一層、元氣よく、せめて、美しく見たいではありませんか――故に昔の拙作に次のがあります。

日の出

あれ　今
お日の出
りつぱな日の出
　ぎら　ぎら　ぎんぎら
　ぎん　ぎらり

東の空に一面に
金の烏が　さんで
金の波が　打つて
金の太鼓が　ひびく
　さん　さん　すささん
　さん　すさ　さん
　さん　さん　すささん
　さん　すさ　さん

あれ　今
お日の出
りつぱな日の出
大きな日の出
お日の出　日の出

さ、ごこまでも、「日の出」を讃美したのです。いふまでもなく、「金の烏」さか「金の波」さかは、旭光に光る雲なのですが、「金の太鼓」さいふのは、明けて行く東の空を見てゐますさ、急に、黄金色の空になつて明るみがさして來ますさ、私にはその遙かなる彼方の空の一方で、「金鼓しきりに鳴る」さいふ感がしてならないのです。

しかし、これは、正月の日の出、卽ち、「初日の出」さ限つたのではなくて、いつもの日の出ですが、次のは、初日を取扱つたものです。海の初日です。前のは、陸上の日の出です。

海の初日

海の初日が
今昇る
海に　ぎらぎら
今昇る

金板竝べて金の橋
銀板竝べて銀の橋
金銀橋の　日の王子
銀のお馬に　金の鞭

海の初日が
今昇る
海に　ぎらぎら
今昇る

この、金の橋――銀の橋、そして、つまりは、金銀橋――までは、棚曳く雲の色ですが、「日の王子」とか、「金のお馬に金の鞭」とかは、目に見える現實ではなくて、聯想です。先の「金の太鼓」と同じです。曉の空に棚曳いて、まだ昇らぬ旭に照らし出されて、金にまた銀に輝やく雲――それを「橋」と見てをりますと、その橋をば、「金の馬」に乘り「金の鞭」を手にした「日の王子」が、想像されるのでした。

四

物音の新年は、羽子つきであり、萬歳の鼓の音です。この二つは、子供にも大人にも、正月氣分を豊かにしてくれます。

おめでたう

あつちだ　こつちだ
子供が　羽根つく
こつちん　かつちん

子供にまじつて
大人も羽根つく
こつちん　かつちん

遠くの空には
あんなに　たくさん
凧が上つてる
お日樣　照つてる

どこかで　ポコポン
あんなに　よい音で
鼓が鳴つてる
唄も聞える

新年　まことに　おめでたう
雀よ　子犬よ　おめでたう
誰でも　彼でも　おめでたう
何でも　かんでも　おめでたう

これは、「おめでたづくめ」の新年の子供の氣持です。見るもの、聞くもの皆美しく、すべてが、新年の爲にあり、子供の爲にあるかさへ、うれしく、おめでたいのです。すべてが、子供自らの爲に――、子供自らの歡喜の爲にあるかさばかり、うれしいのです。子供自らは、さうさは心づきませんが、只もう、うれしいばかりなのです。

五

この羽子つきの唄の中に、廣島縣古市地方のが、『日本童謠民謠曲集』に收められてをりますが、

一びの木
二びの木
三で櫻の
四びの木
五葉の松の
椋の木
七つ梨の木
八つ柳の木
九つ小梅の木
十で　さつて　歳の木

さいふのは、一から十までを竝べた技巧ですが、「一び」「二び」「四び」さは、何でせう。更に、同じ技巧のもので、

一人來な
二人來な
みんな來て
寄つて來て
いつ來ても
無理いふ
何が　あつても
やりやせん
今度　來たら
戸をしめる

さ、「一二三…」を「ひふみよ…」さよんであるのもあります。この「一人來な二人來なー」の冒頭のものは、他の地方にもあります。千葉縣堅田町地方のでは

一人來な
二人來な
三てきて
四つてきて
五つやら
六かし
七んの
八くしま
九のやで
いつちよよ

といふのです。靜岡縣御殿場地方では

一人來な
二人來な
見て來な
寄つて來な
いつきた
むこぎん
ななこの帶を
やの字にしめて
ここのまじや
とほよ

とあります。むこぎのが、「ななこの帶をやの字にしめて」をかしいことですね。また、富山縣上新川郡地方では

しろまめ　くろまめ
なんてん　かんてん
はすのはこ　とまれ
十一　十二
十三　十四……(數へる)

といふさうです。「白豆　黑豆」でせうか、「南天、寒天」でせうか。何の意は無くても「かつちん、こつちん」の擬音とも感ぜられて、幼兒には面白いでせう。

六

正月さん　正月さん
どこまで　ござつた
くるくる　山の
下まで　ござつた
お土産　なんだ
榧(かや)や　搗栗(かちぐり)
ゆづり葉に　垂藻(たらも)
繭玉ふつて　ござつた

これは、富山地方のですが、「垂藻」とは、備後地方で「ホンダワラ」ともいつてゐる「神馬藻」のことでせうか。注連縄につけて裏白の、ゆづり葉と共に、正月のお飾りになくてはならぬ、あれでせうか。

此の「お土産」のことは、偶然ですが、古い拙作にも、次のがあります。それは、今、比べてみますと、題からして、よく似てゐるのですが、全く暗合でした。

お正月さん　　大和田愛羅氏作曲

一、來ました〳〵、お正月さんが
お土産に　たこもつて、こまもつて、
電車もつて、自動車もつて、
その上に、知らぬ間に
お年を一つづゝ、皆に持つて來て

父様と、今、おざしきで、おはなし中。

二、來ました〳〵、お正月さんが
お土産に　まりもつて、はねもつて、
リボンもつて、お人形もつて、
その上に、知らぬ間に
お年を一つづゝ、皆にもつて來て
母様と、今、お茶の間で　おはなし中。

「お正月さん」とは、一種の幻想です。前にも書きましたとほり、「正月が來る」といひます。正月が來ると、どこの家にも、子供のある家なら、きつと、凧や毬が、知らぬ間に子供部屋に、持ち込まれます。これは、きつと、「お正月さん」といふをぢさま、をばさまが、お土産に持つて來て下さるんでせう、といふのです。さう氣がつけば、今、おざしきで、父様とお話し中なのが、そのお客様である「お正月さんのをぢ様」らしく、又、お茶の間で、母様とお話し中なのが、そのお客様である「お正月さんのをば様」らしいといふのです。どこまでも、幻想的です。幼兒の幻想は、まことに、途方もないものですが、しかし、そこに、實は、科學の芽が藏されてをり、發明の泉も湧きかけてゐるのです。

それにしても、此の非常時にまた新年を迎へ得る有難さ。それを思うて、いよ〳〵、幼兒のために、よい事を考へ、よい事を言ひ、よい事をしたいものです。

（昭和一四、一二、七）

久方の天のかぐやまこのゆふべ
かすみたなびく春たつらしも

冬ごもり春さりくらしあしびきの
山にも野にも鶯なくも

——萬葉集——

山風にさくる氷のひまごとに
うちいづるなみや春のはつはな

袖ひぢてむすびし水のこほれるを
春たつけふのかぜやとくらむ

——古今集——